

ペーター・ビクセル

『オルゴール』

訳 岡市純平

ある日妻は言った。

「ピアノがほしいわ」

そして彼には、やがて黒いおぼけが居間に鎮座するだろうということが分かった。彼は言った。

「いや、ピアノは買わない」

彼女は泣いた。

「ピアノはだめだ」と言って彼はオルゴールのところへ行った。

それらは書き物機の隠し引き出しの中にしまってあった。誰もそのことを知らなかった。誰も、彼が絶えずエーデルワイスの刻まれた黒檀製のオルゴールを持ち歩いているとは知らなかった。誰もその音色を耳にしたことがなかった。オルゴールの音は小さい。そして彼は年の市の大きなオルガンを毛布で覆うことにしていた。彼がそれを弾くときには、オルガンは地下室に置いてあった。

彼女はピアノを欲しがり、彼は買ってやった。年の市のオルガンでもよかったが、そうすると本心を感じられただろう。彼女は泣き、もはや挨拶もせず、おそらく夜中に起き出して彼を怒らすために目覚まし時計を壊しただろう。きっと隠し引き出しもこじ開けてしまっただろう。

彼女は学校でオルゴールはくだらないものだと言った。オルゴールはイギリス人が買うものだと言われた。学校でそんなことを学ぶようになってか

ら、彼はそこで学ぶあらゆるもののために隠し引き出しを設けた。

いまや彼女はピアノを弾いていた。そして言った。

「あなたが音楽好きなこと知ってるわ」

彼は彼女が演奏するのを聞き、思うようになった。

「ピアノに比べたらオルゴールなんてどれほどのものだろうか」

「君にピアノを弾いてもらいたくないんだ」と言うべきだっただろう。彼は怖かったのだ。オルゴールのことを忘れ、書き物機の鍵を失くし、誰かが隠し引き出しをこじ開けるかもしれないということが。

彼は恐らくオルゴールのことを彼女に打ち明けるべきだった。しかし彼女は早合点して言っただろう。「あなたが音楽好きなこと知ってるわ」

彼がオルゴールを奏でるのはますます稀になってしまった。居間に座って彼女の演奏を聞き、ピアノと拙い指使いを眺めた。夜になると彼女は彼を抱きしめて言った。

「あなたが音楽好きなこと知ってるわ」

Peter Bichsel, “Musikdosen”, S. 24-26, in: ders., *Eigentlich möchte Frau Blum den Milchmann kennenlernen – 21 Geschichten*, Suhrkamp (st 2567) 1996